

1. 教科として大切にしていること

音楽科は、表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、音楽的な見方・考え方を働かせた学習活動によって、生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力を育成する教科である。新たな音楽との出会いに興味をもち、発展的な学習へと関心意欲を継続させることが大切である。その実現に向けて、自己の学びを振り返り次の問いを立てることができる「主体的な学び」、自己の考えを広げ深めるよう作品・他者・自己と向き合う「対話的な学び」、学びの過程を重視した学習の充実「深い学び」へとつなげたい。

深い学びの鍵となる「音楽的な見方・考え方」とは学習指導要領にも示され、以下（表1）のようにとらえている。

（表1）

①音楽に対する感性を働かせること

音・音楽と向かい合って何かを音楽から感じ取ることが絶対条件であり、学習の成立基礎となる。

②音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉えること

音響としての存在を聴き取り知覚し、感受できる。

③捉えたことを、自己のイメージや感情、生活や社会、伝統や文化などに関連付けること。

音楽を意味のある存在にし、自己のイメージや感情と音楽が関連づいている。

そこで、本校音楽科では、次の3つのことに重点を置く。

（1）表現力を育てる。

表現活動において、技能を磨き表現力を高めるためには、あらゆる場面において自己調整力が必要である。表現の向上はトライ＆エラーの連続であるため、自らおよび仲間の課題を発見し、丁寧に解決に向かう学習過程を大切にし、表現力の伸長を図る。

（2）さまざまな国の文化を尊ぶ気持ちを育てる。

生活や社会には、多くの音や音楽が溢れているが、授業で日本の文化芸能について問うと、多くの生徒が「ほとんど知らない」と答える。自国の文化芸能への関心の薄っていることから、鑑賞活動において、日本文化と出会う機会を大切にする。そして、西洋芸術と比較聴取する学習課題を通して、共通点や相違点を見出し、音楽的な魅力と文化的価値や継承する意義を考えさせ、多面的・多角的な視点の獲得と学びの質の向上に努める。「総合芸術」が複数芸術分野の融合であるため、教科横断的な学びとしても有効である。

（3）仲間と協力し、一体感と達成感を味わう体験の充実を図る。

演奏する喜びや楽しさを通して、仲間を尊重したり、新たな価値観に出会ったりと情緒面に与える影響は大きい。一人では味わうことのできない芸術を創造する体験を他者と協働することや対話を通してより音楽に対する感性を豊かにし、生涯において音楽と豊かに関わる情操を培うものにする。

2. 教科研究のあゆみ

本校の研究テーマ	音楽科としての考察と成果
第 29 次研究テーマ 2017～2018 年度 社会の変化に対応できる生徒の育成 サブテーマ 対話的な学びによって資質・能力がのびる授業	「他者の思いに共感する力」「全体の構造や流れを見通す力」「自己や対象を自分らしく表現する力」を育むため、実践例「翼をください」を通して、楽曲分析（考える力）、音程やリズムを理解し実践する（感じる力）には一定の成果があった。
第 30 次研究テーマ 2019～2020 年度 社会の変化に対応できる生徒の育成 サブテーマ SDGs を核としたカリキュラム・マネジメントの実現	「A 表現」では、【じっくり・いろいろ】【アイディア】の実践例、民謡（Local）をテーマに「5 音階」を使った創作活動を行った。汎用的な音楽の知識（Global）をコミュニケーションツールと結びつけて（Glocal）、意志の疎通が図られ、中心概念【共生、包摂】から STEP へアプローチができた。一方で、技能や知識を定着させる場面設定に課題が残った。
第 31 次研究テーマ 2021～2023 年度 社会の変化に対応できる生徒の育成 サブテーマ SDGs を核に資質・能力が伸びる取組を目指して	【問題発見】【伝達・発信】【問題解決】と行動面【協働】を探究する試みを行った。実践例、「ハナミズキ」では、仲間と作品を創り上げる喜びと感動を味わい【協働】の資質能力の向上には成果が見られた。一方、音楽がもつメッセージ性を【伝達・発信】と捉えづらい点に、学習プロセスを改善する課題が残った。

第 30 次で重視した資質・能力は、表現領域「創作」では【じっくり・いろいろ】【アイディア】、「歌唱活動」では【問題発見】【伝達・発信】【問題解決】の育成である。いずれも【協働】が土台である。第 31 次からは、歌唱領域で内容面【問題発見】【問題解決】に、【振り返り】を加え、行動面【伝達・発信】【協働】の育成を継続していく。生徒の学びがどのように深化するのかが、本時の研究となる。

3. 資質・能力の育成を図る手立て

（1）8 つの資質・能力と音楽科

音楽科は、生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わるために、主体的に取り組む実践力や態度の育成をめざしている。また、他者と関わりあいながら学んでいく特性から【協働】が音楽活動の中心に位置づけられる資質・能力である。

表現活動では、生徒の段階に応じて学習課題を設定する。「何が出来ていて、何が出来ていないのか」「技能を高める練習方法は何か。」「どのような方法で表現すればいいのか」など演奏から問題を見つけ、楽譜に基づいて考えられるよう読譜力の向上を図る。【問題発見】【根拠】【じっくり・いろいろ】

また、「自己と他者」「作品と音楽表現」に向き合いそれぞれのイメージが共有し合えるよう対話的な活動に導く。【伝達・発信】「聴く力」を向上し、よりよい演奏へと高められるよう多角的・多面的に自らの演奏を精査する視点を与え、解決へと導くことが可能となる。【問題解決】【振り返り】【協働】

第3学年で実施した鑑賞活動「唱歌を用いて『越天楽』を体験しよう。」では、課題を段階的に設定した。まず、雅楽の歴史的な背景や成立について、分類されている事柄や舞楽を【根拠】として考えさせた。さらに、管絃を通して楽器の関わり方や旋律の特徴などを聴き取らせた。具体的には、主旋律の役割である竜笛と箏を比較聴取したり、「笙がもつ神秘性はどこからやってきているのか。」という生徒の発言を元に、楽器構造とその音色や管絃における笙の役割という視点を導きだしたりした。【問題発見】【問題解決】

そうすることで、生徒が自らの感性と知識とを結びつけて対話的に思考を掘り下げる姿が見られた。「越天楽」を唱歌する活動になると、不慣れながらもより主体的となり拍の取り方の違いに気づき、「序破急」という日本の伝統芸能に共通する概念を知ることとなった。

このように、対話的思考や協働の学びを通して、生徒の資質・能力が向上できると考える。

(2) STEP とのつながり

音楽の授業では、ペアもしくはグループ活動による対話型の学習を進めていることから STEP とは【協働】の面で繋がっている。また、歌唱発表やパフォーマンス課題において、相手に伝えるためのプレゼンテーションを工夫するなど【伝達・発信】の向上を図っている。

第2学年で実施したパフォーマンス課題「総合芸術について迫ろう。」では、「能」を題材にし、歴史的な背景・文学・謡や囃子・演技・立ち居振る舞い・舞台装置・装飾衣装・後継者問題など各班がそれぞれにテーマを選定し【根拠】に基づいて考えた。発表の場面ではパワーポイント（参照：PowerPoint の QR コード）で分かりやすく仕上げただけでなく、「羽衣」の実演や朗読、扇子を扱いながら謡「東遊びの数々に～」を披露するなどお互いのパフォーマンスから影響を受け、題材に関わる姿へと学びに変容が見られている。【アイデア】

このような創意工夫は STEP での発表との相互関係として生かされ、資質・能力において伸長がみられる。（参照：振り返り）

本校が取り組んでいる STEP（SDGs の探求学習）では、「SDGs アーティスト」と題し、『Art & Music』で『地球温暖化ストップ』をテーマに研究を進めている班がある。歌詞の創作と Garageband での作曲に挑戦し、音楽で【伝達・発信】に取り組んでいることから教科の学びが発揮されている。

また、STEP と音楽科との「資質・能力」の関わりについて、アンケートでは生徒が次のような場面で関係があると答えている。

【越天楽 振り返り】

今まで一度も「越天楽」聞く機会がなかったので、初めてきた。日本らしさがよく出ている曲だと思った。独自の奏法(箏の塩梅奏法とか)や拍子(早四拍子)が重なってそういう音が出ているのだと思った。三管両弦三鼓の楽器はそれぞれに役割を持っているからいい重なりになっているのだと思った。私は の和音が気に入った。大陸から伝わったり日本のものがつながったりで、そういう歴史も越天楽には出ていると思った。たくさんの国の文化が融合しているけど、最後は日本で発展したのがよく分かった。オーケストラの越天楽も豪華な感じで良かったけど、やっぱり雅楽のほうが表現の幅も広がるし、音と合っていていいと思った。唱歌は難しかったのでこれをずっと伝承してきている人たちはすごいと思った。楽譜にも表しにくいのに変わらず続いているのがこの魅力だと感じた。一年生から尺八、能、管絃と日本の音楽や芸能を学んできて、日本の音楽の特徴を掴めるようになったと思う。なめらかに音量や音程が変わることや、速さが変化することだと思う。海外の拍子やリズムにはない文化だから、日本独自のものだと誇らしいと思った。演奏する人など一部の人が知っているのではなく、日本人である私たちも日本の音楽文化や芸能文化について知らないといけないと思った。知ろうとすることが大切。



はじめに能を見たときは本当に初心者で知識も何もないし正直言って能の何が面白いのだろう？と思っていたけれど、自分達の班で能について調べたり他の班のプレゼンを聞いて、知識をつけた後とでは見方が全く変わっていい意味で次は何が起こるのかが、大体の流れでわかるのでみていてあきなかったし、羽衣以外の作品ももっと見てみたいと思いました。日本の音楽は歴史があって学ばないとわからない面もあるけれど逆に少しでも学んでいると流れとか、構成とかがわかって見ていてワクワクできました。

能の学習を通して感じたのは、「いつの時代の人間にも共通するもの」です。能が大成した室町時代から今日まで、さまざまな変化がありました。時代ごとに当たり前も違ったと思います。でも今までずっと能が愛されてきたのは、いつの時代も変わらないもの、能が表現するものが人々をくすぐったからだと思います。能は、この世とあの世の世界を行き来するような感覚を人に与えます。動きもセリフもゆっくりで、時間もゆっくり、でも流れるように進みます。また人間と天人などが登場することで対比がされて、人間のよくない部分が見えてきます。舞台装置が少ないので、能で作られるその世界がより強調されて私たちに入ってきます。そこから観客それぞれが想像を重ねて理解を深めていきます。これは時間を急いで毎日過ごす私たち現代人に、「物事をせかさなさい」ことの大切さを教えてくれる貴重な芸術だと思います。また、人間としてどうあるべきなのかを考えさせ、あの世とこの世を行き来することで心が洗われます。今でも能が人々を惹きつけるのは、このような魅力が潜んでいるからだとも知ることができました。

- ・ 班のメンバーと協力するとき
- ・ 合唱で、他の人と声を合わせるとき・一緒にやる人と調和させるとき
- ・ STEP で研究している内容を授業で学習・発表するとき
- ・ 合唱で、協力して取り組むとき
- ・ 自分なりの練習を考えて実行するとき
- ・ 自主的に練習に取り組もうとする気持ち(積極性)
- ・ 少しでも楽しめるように工夫するとき

上記のように、STEP と音楽科とは「行動面」において、双方に関わっている部分があることがわかる。STEP の問題解決的な学習を支えている【協働】で磨かれた資質・能力が音楽科の学習にいかされている。

4. 実践例

(1) 主題(単元・題材)名 「ハナミズキ」

(2) 目標

- ①音楽の構造や歌詞の内容との関わりについて理解する。 [知識及び技能]
- ②創意工夫を生かした音楽表現をするために必要な技能を身に付ける。 [知識及び技能]
- ③のどの構造や機能を理解することや、歌唱表現に関わる知識や技能を得たり生かしたりしながら、曲にふさわしい歌唱表現を創意工夫する。 [思考力・判断力・表現力等]
- ④音楽活動を楽しみながら、主体的・協働的に歌唱表現の学習に取り組む。 [学びに向かう力・人間性等]

(3) 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
・「ハナミズキ」の曲想と音楽の構造や背景などとの関わりについて理解している。 ・創意工夫を生かした表現で「ハナミズキ」を歌うために必要な発声、言葉の発音、身体の使い方などの技能を身に付け、歌唱で表している。 ・歌唱活動に必要な発声や喉の構造を理解している。	・「ハナミズキ」のリズム、速度、旋律、ハーモニー、強弱などの要素や要素同士の関連を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、知覚したことと感受したこととの関わりについて考え、「ハナミズキ」にふさわしい歌唱表現としてどのように表すかについて思いや意図をもったり、音楽を評価しながらよさや美しさを味わって創意工夫したりしている。	・「ハナミズキ」の歌詞が表す背景や心情及び曲想や味わいに関心をもち、さらに身体の一部である喉の機能にも関心をもち、音楽活動を楽しみながら、主体的・協働的に歌唱表現の学習に取り組もうとしている。

(4) STEP との関わり

①各教科としてのとらえ

活動の目的を生徒自身が発見し、学習者が主体的に【協働】できる学習形態「パート練習」を充実させ、質的向上を図る。全体交流の場で【伝達・発信】する場面もある。学習モデルを定着させ、本番に向けて、生徒が主体的に、放課後練習に取り組めるような土台を授業で作りたい。

②育成したい資質・能力について

本実践では【問題発見】【伝達・発信】【問題解決】の3つの資質・能力に着目し、一連のプロセスとして扱うことで、技術や歌声の変容を実感させたい。クラスで創り上げた合唱を観客に対して【伝達・発信】し、【協働】によって仲間と歌うことの楽しさを味わわせたい。

(5) 指導について

- 本題材における学習指導要領内容との関連は「A 表現」(1) ア, イ(ア), ウ(ア)及び共通事項(1)ア, イである。喉の構造・発声・音色や響き及び言葉の特性を表現と関わらせて理解すること、全体の響きや各声部の声と全体の響きのバランスを調整する技能を身につけること、音楽の構造と曲想との関わりを理解し、歌唱表現を創意工夫し、想いや意図をもって歌うことをねらいとする。「附中のハーモニー」に向けての特別活動でもある。完成までの道のりを仲間と協力して乗り越え団結すること、表現する楽しさと達成感を味わうことを学級担任と協力して支える。最終的には、『ハナミズキ』のメッセージを観客に向けて【伝達・発信】することを実践させる。

読譜力には差があるが、仲間との練習で音程やリズムを認識させたい。音取りは各パートピアノで作成しているため、音符に対して歌詞をどのようににはめるのか迷う部分が【問題発見】の場面となる。常時活動としてブレストレーニングと2オクターブ半の音域の中にさまざまなスキルが織り込まれている「YUBA メソッド」をYouTubeに合わせて発声する。血流が上がり喉を温めるための動作も行う。おもて声とうら声をミックスさせ、換声点を超えるスキルを身に付けさせる。指導者は常に拍を提示し、拍感やリズム感覚を磨く。

パート練習は、8～10人のグループで活動を行う。「課題を発見し練習し解決する」一連の過程を経験させ、放課後練習に活かす土台作りを行う。

1番の冒頭は、ユニゾンによる始まりである。8分音符を活かしメロディーを推進していくイメージと4小節で1フレーズの息を大切にさせたい。12小節にわたって男声が主旋律を歌い、ソプラノとアルトは「uh」「tu」「lu」によって、響きを纏ったハーモニーを奏でるところである。18小節からは三声部の音程がそれぞれ確立できていること、休符でフレーズが切れないこと、言葉が明瞭であること、16分休符を活かして言葉を運ぶことなどが挙げられる。26小節はフレーズの最後ではあるが、2番へのエネルギーが失われないことが大切である。

2番「僕から気持ちは重すぎて」が1番とリズムが異なる。「一緒に」「きっと」の「っ」が消えないこと、「沈んじゃう」の「じゃ」の音色の違い、1番では文末が「終わりますように」、2番では「止まりますように」と母音が同じである為、子音を立てること、27小節では主旋律を支えるアルトとテノールの二重唱によるハーモニーを美しくと、細部にわたって工夫を凝らすこと。

30小節からは、「uh」「lu」だけの音楽表現を考えさせる。口の中の空間や唇を震わせ、お腹で支えて息を出すことなど、発声を工夫し豊かな響きを目指したい。35小節から男声パートはアウフタクト入りのタイミングと、C音をはめる難しさ、「lu」につられないための練習がいる。

38 小節からは、声量を押さえつつ、支えのある声が要求される。歌詞に摩擦音を多く含むことから歌詞の想いと一致させ明瞭な発語に心がけさせたい。ダルセーニョからは、掛け合いのパートに変化があることから、クライマックスへと向かう決然とした思いを表現させたい。コーダから 48～63 小節では、「僕の」の「ぼ」が、ソプラノ・テノールとアルトが異なるタイミングで入る為、正確なタイミングで入ることが出来るよう指導する。「いつか実を結び」の「すび」の部分の音程が異なるのはなぜかを考えさせ、気持ちの変化を表現につなげさせたい。「君と好きな人が百年続きますように」は 5 回繰り返すが、時間の流れを理解した表現を工夫させたい。59 小節にかけられた rit. は歌詞解釈と切り離せない部分あることに気づかせたい。

●歌詞解釈について

家族を想う愛情の深さが歌われている。歌詞に「君」「僕」「母」があるが、この曲の主人公の正体は誰かに迫り、抽象的な歌詞をそのまま歌うのではなく具体的なイメージに変えさせたい。ハナミズキの「つばみ」「実」「葉」に込められた作者の願い、「白」「薄紅色」から浮かぶ幸福のイメージ、情景を表す「空」「帆」「波」「船」と時間経過、解釈を複雑にしている「僕から気持ちは重すぎて」「僕の我慢がいつか実を結び」「母の日になればミズキの葉、贈ってください」など「君」の成長を願うメタファーについても考えさせたい。胸の中がじわりと温くなる理由を歌詞から読み取れるように考えさせ、家族でなくても、大切な人を思いながら歌う気持ちを感じさせたい。

(6) 指導と評価の計画 (全 10 時間)

時間	□ねらい ■学習活動	評価の観点			評価方法	育成したい 資質・能力
		知	思	態		
第 1 時	□「ハナミズキ」のイメージを共有し、楽曲の構成を知り、各パートの旋律を把握する。 ■楽曲のイメージをつかみ、曲の構成を知る。			●	●ワークシート ●行動観察	【協】
第 2 時 第 3 時	□パート練習を通して、旋律をつかみ、仲間の声と自分の声を重ねることができる。 ■練習番号の意味を読み取り、パート練習を進める。	●		●	●行動観察 ●録音提出 ●ワークシート	【発】 【解】 【協】
第 4 時	□「ハナミズキ」の歌詞と背景を考え、歌唱表現を創意工夫する。 ■歌詞の意味を考え、ふさわしい表現を見つける。	●	●	●	●ワークシート	【ア】 【伝】
第 5 時 第 6 時	□「ハナミズキ」の合唱練習を行う。 ■2 パート別になって、全体で合わせながら、ハーモニーやバランスなど全体を見取る合唱練習を進める。	●	●	●	●行動観察	【発】 【解】 【協】
第 7 時	□「ハナミズキ」を発表するために必要な課題を探る。 ■聴衆に伝わる演奏になっているかを考える。	●	●	●	●ワークシート ●行動観察	【根】 【伝】 【協】

第 8 時	□発表の機会を捉え，楽曲の完成度を知る。 異学年の演奏に触れ，発表への意欲を高める。 ■スマイルセッションで発表のイメージを持つ。	●	●	●	●発表 ●ワーク シート (後日提出)	【伝】 【協】
第 9 時	□クラスで創り上げた曲に愛情をもち，仲間とともに附中のハーモニーで発表する。 ■附中のハーモニーで心を一つに発表する。	○	○	○	○発表 ○ワーク シート	
第 10 時 (本時)	□合唱発表を終え，合唱をよりよくするために必要な技能について考察・発信する。 ■「つられない」ための練習方法を考え発信する。	○	○	○	○発表 ○動画	【根】 【伝】 【協】

○「評定に用いる評価」 ●「学習改善につながる評価」

(7) 本時の指導 (10/10)

①目標

- ・音楽を構成する要素を楽譜から読み取り，表現と結びつけることができる。 [知識及び技能]
- ・課題に対する解決策を思いや意図をもって工夫することができる。 [思考力・判断力・表現力等]
- ・課題を共有し仲間と調整しながら主体的に音楽表現の向上に取り組むことができる。 [学びに向かう力・人間性等]

②準備物 楽譜・タブレット・パソコン・スピーカー

③指導計画 (50分)

学習活動	・指導上の留意点 ◆評価	育成したい 資質・能力
1. 導入 (a)「附中のハーモニー」を終えて，練習の時に大変だったことを振り返る。 <予想される生徒の意見> ・声量アップ ・掛け合いのバランス ・「ひらりちょうちょうを」揃える。 ・「ちゃんと」入りのタイミングの違い ・この曲には強弱記号がなかった。 ・テノール 旋律難しい ・どうしてもつられた (b)「つられる」という状態を考える。 ・自分の音が分からなくなる。 ・パート練習で練習した通りに歌えなくなる。	○「附中のハーモニーの練習で大変だったことは何ですか。」 ○自由発言を求める。 ○音楽の要素とそれ以外とを整理して板書する。 ○発言から課題につなげる。 ○「つられた」という意見を取り上げ，「つられる」ってどういう状態になるの」と切り返す。 ○想いを共有させる。 ○強く入ってきた音に音の基準が揺らぐこと。	

・主旋律が邪魔する。 2. 課題を知る。 (a) つられる原因を考える。 個人→ペア	○頭の中で自分の音が鳴っていても、耳から入る音に影響されること。 ○どうしてつられるのかを考えさせる。 「つられるってどうして起こるのだろう」 ○個人で1分考えさせた後、ペアで話す。 ○良い合唱を作るうえで避けては通れないテーマであることを伝える。 ○どのクラスも悩んだこと。練習方法を知っていたら、苦勞せずに済んだかも。	【発】
【課題】 つられないための練習方法を考え、解決策を2Dから全校生徒に発信しよう。		
(b) 活動の方法とプレゼンテーションを行うことを知る。 3. 解決方法を考え、試す。 グループ活動 ＜予想される生徒の活動＞ ・パート別の旋律を再確認 ・2パートずつ合わせ、1パートが聴いてアドバイスをする ・声量のバランスを工夫する ・パートを交換する ・大切にしたい歌詞について意識する ・隊形に工夫をして練習する ・強弱をつけると有効かも ・歌詞に込められた感情を共有したい 4. プレゼンテーションを行う。 5. 振り返りをする。 ・ロイロノートに提出する。	次の4点を伝える。 ○次の2か所から選択 22～2カッコ 28小節 or D ○A～Cの12人グループで活動すること ○試したりして練習方法を見つけること ○5分以内のプレゼンに、メッセージと実際の歌声を入れた発表にすることを伝える。 ○動画を撮影することも伝える。 ○この方法は有効だと思う練習方法を見つけさせる。 ○12人の中でリーダーとピアノが弾ける生徒がいるように配慮しておく。 ○パート間を交換してもよいとヒントを出す。 ○机間指導でパート別にどのような視点をもっているのかを把握する。 ◆さまざまな表現方法を工夫し、試している。(思) ◆つられないための有効な練習方法について工夫している。(思) ◆自分たちの想いを伝えるプレゼンテーションと演奏を行っている。(思)	【解】 【伝】

（８）成果と課題

題材（全 10 時）を通して、主体的・対話的に課題に真摯に取り組み、学びを充実させ資質・能力を向上させ生徒の姿があったといえる。それが顕著に現れたのが、「ハナミズキ」の 21 と 51 小節の「ちゃんと」というフレーズが、何回歌っても 3 パートでどうしても合わないといった場面である。生徒は「問題は何なのか」を一つずつ自分たちで試しながら、3 声部それぞれの旋律を確立させる必要や、リズムに微妙な変化があることに気づいた。そこで、拍を数えたり、息を合わせてリズムを叩いたりしながら、効果的な練習法を考え出し成功させた。

また、一体感が生まれた場面でもあった。【問題発見】
【問題解決】【アイデア】〔参照：生徒の振り返り〕

音程・リズム・ハーモニー・フレーズ・声量・発声法・声質など、合唱を完成させる過程において、具体的な【根拠】にあたる〔共通事項〕を意識することもできてきた。指導者は、一連の学習活動に視点を与え、即時評価によって「小さな達成感」を積み重ねられる学習課題を設定した。パート練習の活動を取り入れ、小さな集団から大きな集団へと全体練習でも自分たちの意見を伝え合えたことで解決に至る場面が多くあった。【協働】

表現や技術の向上は伝え合うことによって支えられているが、本来音楽は言葉による【伝達・発信】だけではない。音楽科最大の強みは、「音楽」がそこにあるという前提にある。「音楽」そのものに力があるからこそ、曲に込められた想いに自分たちの想いを乗せて【伝達・発信】できる。これらの学習モデルが定着し、STEP が目指す自律した集団づくりを推進すれば、本校が大切にしてきた「附中のハーモニー」にも繋がり、音楽科として生徒の情操教育に貢献できると考える。今後も生徒に仲間と歌うことの楽しさや達成感を味わわせることを目標としたい。



☆ 振り返り

まず、発表についてテノール、アルト、ソプラノがどこも崩れることなく個性を感じられるほどみんな大きく気持ちを入れて歌うことができ、しかもうまく調和していて綺麗にハモれていたなと思いました。また、YouTubeに上がっているものも聞いてみると思っていた以上にできてよかったなと思いました。クラスで練習をするときのことについては、どこを練習する（合わせる）かや、どう練習するかなど議論になったりしたこともありますが、何回も重ねていくうちに、前へ前へ成長していったというのが感じられて、そこは一回一回の喜びになったなと思いました。また、パートで合わせるならまだ簡単だけど、「ちゃんと」などみんなまで合わせるところが、難しかったです。さらに、気持ちをこれることもみんなでがんばってよかったなと思いました。

時には言い争いになったり、表現の仕方の違いで論争になったりしたけれど、皆でより良い音楽を求めて頑張ったあの時間がなによりも尊い事だと思う。

ハモリの所は最後までみんなで工夫して練習をした、とにかく大変な所でした。それでも本番は今まで練習してきた成果を出して歌う事ができたように思います。また、「ひらり～蝶々を～」の所は本番で一番綺麗にみんなの気持ちがこもった歌にできたように感じます。

来年も、この経験を生かして頑張っていきたいと思います♪

5. 成果と課題

本時研究を通して、音楽科では、【協働】において、一定の成果があった。昨年度末に実施したアンケートでは、「STEP を通して成長したと感じる『学ぶ力』の中で、各教科の学習に生かすことができるのは、どの教科のどんな場面だと感じますか？」との質問に対し、「音楽」と回答した生徒も若干名いた。そして、その記述の中には、「班のメンバーと協力するとき」「合唱で、協力して取り組むとき」とあり、【協働】の資質・能力が STEP を通して音楽の授業で生かされたと感じていることがわかった。

音楽科の授業においては、単に「みんなで一緒にやりましょう」ではなく、生徒同士の相互理解に至るまでに起こるさまざまな摩擦や協調を繰り返し経験しながら、仲間を尊重するという意味を学ばせられたことで、生徒の資質・能力に変容が見られたと考える。これらの人間的な成長だけではなく、「附中のハー

モニー」という目標を掲げ、音楽的なスキルの向上、音楽表現の創意工夫に励み、一つの作品を協働し創り上げる姿にも成長があった。【問題発見】【問題解決】【振り返り】により作品の精度を高めていったことは間違いなく、作詞作曲者の想いや意図を等身大の自分と重ね合わせながら、想いを込めて表現することを学ぶ創造性の高い学習となり、達成感と団結力を味わったことによって得られた喜びもあった。

課題は、音楽科において、【伝達・発信】の意味するところが明確でなかった点が挙げられる。その1つは、STEP 学習や他教科と同じく、他者に対して想いや意図を「言葉」で伝えるためには「根拠」が必要であること。【根拠】となる音楽的な知識のあるなしによって、どちらかというところ「伝達・発信される側」に留まる生徒がいた点にあり、生徒のアンケートからも分かる。発展的な学習に一步踏み出すためには、【根拠】となる知識の習得をより確実にを行うことを次回への課題としたい。2つ目は、【伝達・発信】に音楽特有の意味を込められなかった点である。題材そのものに「メッセージ性」があることは、音楽が人々の心に作用することからも分かる。生徒は学習者であると同時に表現者となって合唱曲を披露する。聴衆に向けた言葉を越えた表現が【伝達・発信】なのだと指導者がイメージをもたせられていなかったために、生徒の中に STEP で目指すところの資質・能力【伝達・発信】とつなげられなかった点があった。

社会の中における音楽の役割といった視点で考えてみると、【伝達・発信】というものには、芸術的な感動がある。加えて、これからの社会に向け、実質的に意味のあるもの、役に立つものを「音楽科」からも発信していきたい。「SDGs を核に」ということで、本校生徒が楽しみ常時活動にしている発声「YUBA メソッド」から「健康と福祉」に中学生なりにアプローチできると考える。現在日本が抱えている高齢化社会・医療費圧迫など、これからの社会に貢献でき、有益となるような活動を中学生が発信できればと考える。

〈参考文献〉

- MI 三重大学教育学部附属中学校（2018）：『研究紀要 社会の変化に対応できる生徒の育成 一対話的な学習によって資質・能力が伸びる授業 - 』第 29 集。
- MI 三重大学教育学部附属中学校（2020）：『研究紀要 社会の変化に対応できる生徒の育成 一SDGs を核に資質・能力が伸びる取り組みをめざして - 』第 30 集。
- MO 文部科学省（2020）：『国立教育政策研究所「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 中学校 音楽』東洋館出版社。
- MO 文部科学省（2017）：『中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 音楽科編』教育芸術社。
- HI 広瀬肇・弓場徹（2020）：『誤嚥防止のための発声指導 基礎と YUBA メソッドの実践』インテルナ出版。
- YI 弓場徹（2015）：『ミックスボイストレーニングで必ず歌が上手くなる本』主婦の友インフォス情報社。